

# 「におい」から読み取る植民地朝鮮の差異化過程 —湯浅克衛の「橐」をめぐって—

河 昇彦

## 要旨

湯浅克衛「橐」（1937）は、日韓〈混血〉児が主要な作中人物として設定されているため、従来の研究ではその〈混血〉児のアイデンティティ選択の問題が重要な論点となってきた。それは日本人が植民地支配の協力者であり、朝鮮人が植民地支配の抵抗者であるという二項対立の構造に陥りやすく、また湯浅克衛の評価においても協力者あるいは抵抗者かのどちらかに単純化する危険性を孕んでいる。しかしながら「橐」には植民地朝鮮を生きた多様な人間像が書き込まれており、被支配者の朝鮮人のみならず、突然支配者側にまわされた庶民階級の日本人の姿がその間で生まれた〈混血〉児を通して浮き彫りにされている。本稿では「橐」に豊富に描きこまれた「身体性」とりわけ「におい」の表象に注目し、その「身体性」が朝鮮と日本を区別し、差別に利用されていく差異化の過程を考察する。そしてそこから見えてくる植民地朝鮮の矛盾に満ちた現実と、その現実を生きることによって苦しむ〈混血〉、そして〈混血〉への眼差しによって浮き彫りになる在朝日本人の矛盾をも明らかにすることで、テキストの日本の帝国主義に対する批評性の内実を検討したい。

キーワード：湯浅克衛、橐、植民地朝鮮、日韓混血、差異化、身体性

## 1. 課題設定

1910年生まれの湯浅克衛は1916年から27年までの10年余りの少年期を朝鮮で過ごし、その記憶を元に植民地朝鮮を舞台とした作品を数多く残している。その中でも『中央公論』1937年7月号に発表された「橐」<sup>1)</sup>は、日韓〈混血〉児を主人公としていることから、湯浅の作品の中では比較的注目されていると言える。しかしながら、この〈混血〉に対する関心はむしろ、日韓を二項対立的な図式で捉え、〈混血〉である人物が日韓のどちらのアイデンティティを選択するかということに重点を置き、その選択の内実によって作品全体の植民地支配への抵抗の有無を判断するという単純な論理展開に研究を導く傾向があり、テキストそのものの分析を妨げてしまう結果を生んでいるように思える。

朴光賢は「橐」の混血問題が日韓の間でのアイデンティティ選択における単純な葛藤構造によって構成されているとし、湯淺自身の朝鮮に対する主観的認識しか示されていないと結論付ける<sup>2</sup>。また長瀬由紀峰は朝鮮における神社の特性や日本男子の教育において重視された「大和魂」の根底にあるものを分析する。そしてまだ植民地というものを完全に理解できていない小学生の金、太郎<sup>3</sup>を語り手とみせかけながら、実はその語りには成長した金、太郎の視座が内包された後語り形式がもたらす効果について論じている。それと同時に、長瀬は物語の空間的背景であり、湯淺が実際居住していた水原〔スウォン〕の地理的構造を重ねながら、作家の朝鮮に対する愛着とその場所が孕んでいる植民地統治の矛盾を暴くことによって、「橐」と「橐」の主人公が成人した後の在り様が描かれた「心田開発」<sup>4</sup>（1937年10月）がもつ抵抗の声を見出しているとしている。しかし長瀬は湯淺が朝鮮側に寄りすぎることによって、湯淺の第一の故郷であったはずの日本を忘れるという「無自覚」をおかしていたと指摘し、その点こそが「橐」の限界点であると評価している<sup>5</sup>。

池田浩士は「橐」を日本と朝鮮をいずれも故郷と感じ、日本と朝鮮のあいだで引きさかれているという想いをいただいた作家自身が投影された作品であり、朝鮮とその抑圧された民衆とに対する湯淺克衛の共感を「橐」ほど切実に吐露した作品は他にないと、湯淺の批判的眼差しを高く評価している。しかし池田もまた、このような抵抗の声が、ある程度自身が少年期を過ごした朝鮮に対する愛情という感情的なものから起因した、「作家自身の投影」という「無自覚」から引き出されているが故に、信頼度が損なわれている点をその限界として提示する<sup>6</sup>。湯淺克衛の小説集の編者でもある池田は、湯淺作品の全体像を把握する上で「橐」と「心田開発」における湯淺の問題意識を認識してはいるものの、湯淺が植民地朝鮮の現実にかに意識的であり、そのことをいかに緻密にテキストの中に書き込んでいるのか、そしてそこから生まれる批評性とは何かという点にまでは注目していないようである。

しかし「橐」で扱っているのは〈混血〉を登場させることによってアイデンティティの選択やそれに伴う苦悩などといった〈混血〉児自身の問題だけではない。その〈混血〉をどのように扱うのかで葛藤する周辺人物（日本人、朝鮮人、女性、男性、子供、大人）、すなわち朝鮮人あるいは〈混血〉に対する区別の基準を作り出し、実践する側の差別に至るまでの思考形成過程を描写している。このように「橐」には日本の韓国併合によって植民者として植民地朝鮮に編入された在朝日本人が抱える矛盾までが描かれているのである。そのような点において、「橐」は朝鮮人のみならず、植民地朝鮮を生活の場とする在朝日本人の姿の細部までを表現している稀有な作品といえるだろう。

このような朝鮮人や〈混血〉への「差別」が形成されていく過程を探るにあたって、その思考の根底をなすものが何なのか遡ってみる必要があるように思われる。西欧の植民地支配の正当化、すなわちより優越している「白人」が「有色人種」を支配すること

は、当然のことであり啓蒙することだという支配論理が展開される過程では、異なる「人種」の混合により生まれた混種は主にその外見から（とりわけ肌の色において）今までに存在しなかった恐ろしいものとして対象化されていた。それは、劣位に置かれた種との混合により産み落とされたものであるが故に、優越する種の側からすれば、絶えず自身とは差異化された存在であらねばならなかった<sup>7</sup>。そこで導入されるのが混種-混血の多様な身体的特徴であり、それによって自身よりも劣った「他者」として認識することが可能となるのである。その過程において文字通りの暴力性が発露することはいうまでもないことであろう。

人間の〈皮膚〉に注目し、文学の中の身体イメージを分析しているクラウディア・ベンティーンは、「人種」による差異化、すなわち〈他者〉の境界づけと価値の切り下げ、及び、これに関連したさまざまな評価などが絡み合った、多分に複合的なこの現象において、皮膚とその〈色調〉がどのような特殊な役割を演じているのか、という問いに焦点を絞って考察している<sup>8</sup>。そしてその基礎をなすのは〈白〉と〈黒〉という対立軸を基調とする思考の枠組みであり、その枠組みにおいては、白を基本色とし、黒は白の老化として劣位に置かれ、両者が合わさった〈混合皮膚〉は〈汚れ〉として認識され、恐怖（驚異）を与えるものとして対象化されるのだという<sup>9</sup>。しかしながら、このような西洋的な枠組みは、〈白〉を基本色としない日本にはそのまま適用することはできない<sup>10</sup>。しかも身体的特徴だけでは日本人と差異化しがたい朝鮮人に関しては、皮膚の色という視覚的特徴を用いて、支配論理を正当化するのは無理がある。そのため、日本は支配する側と支配される側を区別する新しい境界線を考案しなければならない状況に直面するのである。この差異化の基準は後天的に真似できないような、何か生物的なものである必要がある。湯浅は「橐」において、優越している「はず」の日本人と〈血を混ぜる〉ことで、朝鮮人より改良されている「はず」の〈混血〉児の身体性や、内地を知らない子供が嗅ぎとる内地のにおいなど、支配者の優越性を説明するために用いられた身体感覚を緻密に織り込んでいる。そして「橐」に描かれる日本人は、植民地朝鮮において支配論理を構成し、刷り込む日本政府や内地の知識人ではない。むしろ母親や乾爺さんのように朝鮮人と共に生活をする庶民であると同時に、内地では失敗を経験した人や弱者とみなされる存在である。そのため朝鮮経験が乏しい内地の支配者側が作り出した論理を、抵抗なしに受け入れる側でもある。しかし彼らこそ日常的に差別を行なう主体であるというアイロニカルな関係性は、必然的に現実とのズレや矛盾を作り出す結果と結びつく構造を成しているといえるだろう。よって「橐」に現れている差別の実践において、日本人は朝鮮人より優位にあるため、支配者側として捉えるべきだという論理の立て方がいかに説得力に欠けているかが容易に看取されるのである。

前述したように日韓〈混血〉が登場する作品の研究においては、アイデンティティの選択問題と絡めて「抵抗」という文脈から分析される傾向がある。そして日本人作家に

よって朝鮮や朝鮮人が描かれた作品からは当時の日本人がみた朝鮮像、あるいは朝鮮人像が読み取れると期待されることが多い。このような研究傾向には、植民地支配への抵抗や朝鮮人像といった前提となる方向性あるいは基準をあらかじめ設定した上で、検証しようとした類型が発見されたらそれ以上は探求しようとしないうという限界がみられる。たしかに植民地支配の下で、〈混血〉を対象としたこと自体、〈混血〉が支配者側にとって支配者に編入させることも、被支配者と同様に扱うこともできない、扱いに困る存在であったことを考慮すると、評価されるべきことである。そしてそのことは内鮮結婚や恋愛を扱った作品は多くみられる反面、その間に生まれた〈混血〉が登場する作品が少ないという事実からも、当時の人々が〈混血〉をどういう存在として扱ったらいいか困惑していたことが証明されている。しかし、〈混血〉を扱っているということに対する表面的な評価により、テキストがいかに〈混血〉を表象しているのかという問題が詳細に検証されないままに放置されている。とりわけ、日本帝国という現実の下で朝鮮人を差別する過程で発生する矛盾に関する問題意識を前面に出さない語り方をしていた湯浅克衛の作品は、比較的文学性の低いものとして扱われ、綿密なテキスト分析すら行われてこなかった。

しかし「棗」には湯浅が直接経験した、韓国併合によって朝鮮という他の土地に、植民者として編入された在朝日本人が抱える矛盾まで描かれており、そこから十分に批評性を発見することができると思われる。本稿では「棗」に表れた「身体性」、とりわけ「におい」に注目し、そこから見えてくる植民地朝鮮の矛盾に満ちた現実と、その現実を生きることで苦しむ〈混血〉、そして〈混血〉への眼差しによって浮き彫りになる在朝日本人の矛盾をも明らかにするという、テキストに潜在している日本の植民地支配への批評性の内実を検討したい。

## 2. 混血の身体

「棗」は日本人の母親と朝鮮人の父親をもつ「金、太郎」の小学校入学前から小学校高学年になるまでの、幼年期の物語が後語り形式で語られる短編である。金、太郎の母親は日本留学に来ていた父親につれられ朝鮮に渡るものの、金、太郎の父親には既に本妻と子供がいたことが発覚し、妾に転落してしまう。そして金、太郎は母親と二人で暮らし、父親は四日市が立つ度に金、太郎のところにやってくるような生活をおくっていた。ある日、金、太郎を日本人の通う小学校に行かせようとする母親と、朝鮮人の子が入る普通学校に入学させようとする父親の間で激しい口論となったことをきっかけとして、母親は家を出て行ってしまふ。その後、金、太郎は母親と交流のあった乾爺さんに預けられ、そこで厳しい「大和魂」の教育を受けながら、小学校に通うことになる。父親はたまに乾爺さんのところに訪ねてきて、養育費を渡していた。また、金、太郎をつれて市場の酒幕<sup>11</sup>に行き素麺を食べることで息子との繋がりを保っていたのだが、その市場

で父親といるところを小学校の日本人級友<sup>12</sup>に目撃され、いじめられるようになる。その後、父親とは市場に行けなくなった金、太郎は、市場の代わりに風呂屋に行くのだが、そこには母親と金、太郎が父親と離れて暮らすことになった元凶とされる祖父の家父長制を体現するような裸<sup>13</sup>が待ち受けているのである。結局どこにも居場所を失った金、太郎には家出をした母親が内地に戻った<sup>14</sup>ということだけが、せめてものの心の慰めになっていたのだが、その慰めさえ否定されるような母親の手紙を読む場面で物語は終わる。

このような来歴をもつ金、太郎には、彼の奇妙な名前と同様、特殊な身体的特徴が付与されている。

頭が重いので、馳つくらや陣取をするとよく頭から転んだ。棒倒しをすると、足をすくはれて、ポプラの綿花を口に一ぱいつめ込まれた。[…]、金、太郎はよく重い頭からのめつて、組敷かれた。(182頁)

「金、太郎」に与えられた頭が重くて転んでしまうという身体性は、支配者側であるはずの母親が植民地朝鮮において被支配者側に転落した現実と共に、矛盾した植民地の風景をみせる。また頭が重たくて頭から転び、逆さになってしまう「金、太郎」の姿は、「金、」という重たい朝鮮の名字と「太郎」という日本の名前<sup>15</sup>によって揺れる「金、太郎」の主体性の象徴として読み取ることも可能である。その上に普通学校の朝鮮人生徒達との喧嘩の場面において転んでしまい、朝鮮人子供に組み敷かれる金、太郎の描写からは自分の意思とは関係なく日本人社会に編入されることを余儀なくされたことから生じる矛盾が読み取れる。すなわち集団から追放されないために先頭に立って戦うものの、「金、太郎」の名前が視覚的に与えるイメージと同様、異様な身体特徴として持たされた重い頭のせいで、日本人社会から劣等なものとして扱われる朝鮮人社会の集団にまで下敷きにされてしまうという、日韓〈混血〉がもつ負の構造をさえ覗きみることができるのである。金、太郎に与えられた身体的特徴は「重い頭」だけではない。

肱を水平に高く上げてみると、肩がだるくつてすぐ下つてしまふ。何度上げても仲々乾爺さんの云ふ通りにはならなかつた。金、太郎は自分の腕は少し曲がつているのぢやないかと思つた。学校の退け時間から一二時間程代り代わりに十五六人づゝほど小学生達がやつて来た。みんな二年や三年や四年や、もつと上の者達だつたが、乾爺さんにそんなに直される者はなかつた。たうとう、或日、乾爺さんは「お前の腕は曲がつとるなあ」と発見し[…]、乾爺さんが笑ひだしたことがある。「どんびきのやうちや、アツハツハ」(181頁)

「日本人」になるために、乾爺さんによって大和魂を得るための訓練の一つとされる弓を厳しく鍛えられている金、太郎であったが、実は乾爺さんの教え通り弓を射るために必要な身体条件が欠如していることが判明するのである。その欠如のゆえに、金、太郎は「乾爺さんにそんなに直される者はな」い中、一人だけ注意されつづけるのである。そしてその体の特徴をみつけた乾爺さんは大声を出して嘲笑する。とうとう乾爺さんに大和魂をもった内地人になれない要素を発見されてしまったのである。この腕が曲がっているという身体的特徴は作者自身のものでもあり、また、実際母方の祖父に弓を習っていた経験も有していたため、この挿話は作家の自伝に基づいたものと考えられる<sup>16</sup>。しかしながらテキストでは、その身体的特徴を日本と朝鮮の〈混血〉である金、太郎に付与することによって、別の意味を帯びたものとなっているのである。

金、太郎が大和魂をもつことの不可能性は金、太郎が小学校に入る前からも既に提示されていた。乾爺さんが「わざわざ内地から持って来たと云ふ自慢の」(173頁) 八ツ手の木が襲い掛かってきそうで、常に怖がっていた金、太郎の姿がそれである。八ツ手の木で象徴される内地、あるいは大和魂を怖がっている金、太郎は、決して内地人に完全に同一化できない彼の運命を示すようでもある。同化政策の合理化にも利用された優生学的側面からは、日本人との結合によって少なくとも朝鮮人よりは優秀な存在となっていなければならないにもかかわらず、このような身体性ゆえに朝鮮人よりも劣位に位置付けられる金、太郎の存在は、日本の植民地支配の論理の前提となる優劣関係を問いに付す契機として作用するものであったといえるだろう。

このような個人の身体性以外にも、日本の植民地支配の正当性に亀裂を生じさせるものとして作用するのが、嗅覚という身体感覚である。「棗」の中に頻繁に出てくる「におい」というキーワードは二つの位相に位置付けることが可能である。それは、テキストにおける「臭」＝朝鮮と「匂」＝日本という表記の差異によって構造化されている。例えば、朝鮮を象徴するだろう父親と市場のにおいがそれぞれ「父親のゴム臭い」腕の中」(177頁)と「市場の臭ひ」(184頁)として表れている。朝鮮のにおいに関しては「悪臭」のイメージを喚起する「臭」という字を用いているのである。その反面、内地を象徴する母親と、級友の家に内地からとついできたお嫁さんのにおいに対しては、「母の肌の匂ひ」(179頁)と「内地の匂ひ」(182頁)という表記が用いられており、香りの意味に近い「匂」という字によって描写されていることがわかる。

しかしながら金、太郎の嗅覚は、これらの「臭」／「匂」という表記がそれぞれ喚起するイメージに沿うものを感じとってははいない。むしろ、金、太郎は「臭」とされておられるそのにおいから父親の愛情を感じ、乾爺さんの厳しい大和魂教育に疲れ果てた時には市場にいきその「臭ひ」を嗅ぐことで確かな安心感と癒しを得ているのである。そしてそのことに対して金、太郎が自覚的でもあったことは、テキストで以下のように示されている。

その日から、金、太郎は市場が嫌ひになつた。けれども、ほんたうに嫌ひなのではなかつた。

がまんして弓道場の裏手で見てみると、[…]すると市場の臭ひがぐんと鼻に甦つて来て、時々矢も楯も堪らなくなつて、市場の人混みのなかにはいつて行つた。

市場は不思議な臭ひがした。枯草のやうでもあり、葱のやうでもあり、乳のやうでもあつた。水のやうでもあり唐辛子のやうでもあり、砂糖のやうでもあつた。垢や油や汗の臭ひも交つてゐた。(184 頁)

ここで示されるように、金、太郎は自身が学校でいじめられる要因ともなつた場所である市場の「臭ひ」を嫌いになろうと思ひながらも、決して嫌いになることができない。むしろそれは金、太郎にとって、嫌悪の対象ではなく、愛着の対象として表象されているのである。このように「臭」という否定的意味をもつ字によって表わされながらも、そこから引き出される感情は肯定的なものであるという転倒は、朝鮮のそれとは逆の形をとって内地の「匂ひ」からも発見される。次節では湯淺が「臭」と「匂」を使い分けて叙述したことから看取できることについて論じることにする。

### 3. 差異化のにおい

学校では何でも内地内地だつた。「いゝなあ、いゝ鉛筆だなあ」「それは内地のだもん」「家の兄さん今度お嫁さんを貰つたど、内地から来たんだど」「嘘云へ」「ほんとだど。ほんとに内地から来たんだど」

すると皆羨やましがつて覗きに行つたりした。然し内地から来たお嫁さんだからと云つて特別綺麗でもなかつた。皆がつかりして、内地のお嫁さんの匂ひだけ、くんくん嗅いで帰つて行つた。(182 頁、下線は引用者による)

朝鮮で小学校に通っている日本人の子供たちは朝鮮生まれであるか、幼い時に朝鮮に渡つて来たため、内地での経験がほとんどないのだが、植民地朝鮮において統治者側であるという優越感は、子供たちにもしっかりと受け継がれている。しかしながら、「内地のお嫁さん」が「特別綺麗でもなかつた」ことに子供たちが失望するという引用部分のエピソードには、その優越性を担保するはずの内地人の「特別」さが、実は無根拠であるということが図らずも露呈してしまっているだろう。それゆえに、子供たちは「内地の匂ひ」という、内地経験が乏しい彼らには認識しえない要素によって妥協せざるをえないのである。

しかしながら、このように日本人の子供たちが知覚した「匂ひ」も、金、太郎にとつ

ては内地と結びついた肯定的なものとして捉えられることはなかった。それは、「楊柳の木は肌は柔らかくて、そつと嗅ぐと、母の肌の匂ひもほのかに感じられた」(179頁)という記述にみられるように、当初は母親のいい思い出と結びつけられ用いられていた「匂ひ」という表記が、その内地での惨状を知らせる母の手紙に感じたのが「母親の肌の臭ひ」(186頁)であったという、表記の転換からも明らかであろう。このように、金、太郎にとっては、内地は肯定的な「匂ひ」と結びつくものではなく、むしろ否定的な「臭い」と結びつくものとして表象されているのである。ここには、先述した市場の「臭い」を愛着の対象として知覚するという描写によって行われた価値転倒とは異なり、否定的なイメージを喚起する「臭い」をそのまま内地に結びつけることで、日本と朝鮮の優劣関係の転倒が行われているといえよう。

湯浅はこのような逆転の手法を用いることで、「棗」において日本と朝鮮という二項対立の形をできるだけ避けようとしているように見える。一見鮮明な対立構造をなしているように見せながら、その後続く叙述においてその意味合いを逆転させたり、揺らがせたりすることにより、植民地支配の論理が不変なものではなくむしろ脆弱なものであることを露呈させるという、「棗」の物語の展開において一貫してみられる方法である。

「におい」と感覚に関してもう一つ注目したい点がある。性別化された身体イメージとしてのにおい、言い換えれば性別化された「におい」のイメージがそれである。金、太郎という子供において他の感覚よりも鋭敏であり、彼の記憶と結びついているのが「におい」であるが、朝鮮と日本というレベルではない、父親と母親のにおいというジェンダーレベルの「におい」の差異も存在する。金、太郎が父親と結びつけて記憶する「におい」というものは父親が与えてくれる棗の「におい」や、父親が金、太郎母子の生計のために市場で売っているゴム靴のゴム臭い「におい」である。それに比べて母親から連想される「におい」は肌の「におい」というより身体的で原始的な性格のものである。父親(=男性)からは物的で経済的なものとなつがる「におい」を、母親(=女性)からは身体的なにおいを感じ取っているのである。すなわち父親の「におい」は経済力を伴う職業の痕跡であり、母親の「におい」は子供を産みそだてる母親としての役割の強調からくる、出産と母性を基礎とするより、性的なものである。

このような言説は、日本による朝鮮の日本的近代化の一環として、男性と女性の役割を家庭外と内に明確に区別することを目的とする教育がなされていたことから説明できる。この時期の男性は、植民地化に伴う国家的要求により、家庭の外に出ていき、職業活動を通して経済活動のみを担うように要求<sup>18</sup>されていた。湯浅はこの男性像の強要が朝鮮社会でいかに不協和音を起こしていたかに関して意識的であったように見える。そして子供を捨てて逃げた母親という存在は、日本が理想とする女性、すなわち家事を専業とし子女を立派な日本国民としてそだてる女性を作り出す「教育」が失敗した例と解

積することもできる。母親は日本人であるにもかかわらず、日本が朝鮮との間の差異<sup>19</sup>を無視し、一つの国家に併合する過程で惨めな境遇に陥った人物ではある。彼女は子供にもヒステリックであると表現され、子供を捨てて男と逃げたがその男とも別れ一層大変な生活をおくることになる。この状況は一見母親の役割を果たさなかった罰を受けているという単純な懲悪の構造のように読み取れる。しかしテキストにおいてより重要なのは、その母親の状況そのものではなく、その状況に対する金、太郎の認識の方であろう。自分を捨てて逃げた母親に対して、金、太郎は決して軽蔑したり憎んだりしていない。ただ内地に戻るということが自分の傍を離れていったことに対するせめての慰安であった金、太郎はより悲しみ、母を懐かしむようになっていたといえる。そのことを考えあわせるならば、手紙からするはずのない「母親の肌の臭ひ」を嗅ぎとった彼の行動は、その悲惨な近況を知ったことでより一層強められた母への愛着の表現であったとも考えられるだろう。それゆえに、この母に対する「匂ひ」から「臭ひ」への変化を、先述したような単純な「転落」として読み取るだけでは不十分であろう。むしろそこで重要なことは、金、太郎にとってそれが「枯草のやうでもあり、葱のやうでもあり、乳のやうでもあつた。水のやうでもあり唐辛子のやうでもあ」る市場の「臭ひ」と同等のものとして捉えられているという点である。なぜなら、そのような内地と結びついた母から「匂ひ」ではなく、愛着の対象としての「臭ひ」を嗅ぎ取るという金、太郎の知覚の表象は、それまでテキストが提示してきた朝鮮＝「臭」／内地＝「匂」という構造が崩れる瞬間そのものの表象であったともいえるからである。ここには、金、太郎のにおいに対する知覚の変化を通して、植民地支配の論理における優劣を孕んだ二項対立が無効化されていく様相を看取することができるだろう。

日韓混血の特殊性といえ、彼らを身体的な面からは区別できないという点が挙げられるだろう。確かに西洋が主体となって生み出した混血の差異化過程と比較すると、日韓混血の場合、その視覚的領域から判断できる混血の特徴は薄いものである。しかし「橐」に見られる身体性の表現からは、似ているものの中からも、極めて微かな差異でさえあれば何とかしてでもそれを見つけ出し、誇張する形で差異化を進めていたのが植民地支配の戦略だったということがわかる。西洋においては視覚の領域から簡単に差異化の恣意的な根拠を見つけることができたため、その言説の成立過程が嗅覚の領域まで浸透してくることはあっても、前面に打ち出されることは稀であるが、日韓混血の場合、その差異を探る過程でにおいという側面にまで辿りついたのであろう。においというものは現代においても主にその国固有の食文化から独特なものがあるとされている。例えばその国に長く居住していない者からすると、日本からは醤油やだしのにおいが、韓国からはニンニクのにおいが感じられるといわれる。現代よりも食文化が固定的であった頃の人間からするとそのにおいの差はより強烈なものであつただろう。史料には現れがたい差異が「橐」という文学作品には書き込まれ、どのような原理をもって差異化を進

めていたのか、そしてその差異を差別に利用することがどれだけ根拠のない無意味なことかまで表象されているのである。

三橋修は日本において嗅覚がいつからどのように認識されてきたのかを時代に沿って考察している。彼の考察からまず分かるのは、においへの意識的な関心とその認識が、「臭い」という悪臭の感覚から始まり、「匂い」の発見に繋がっていくということである。通行の自由が許されるようになり、都市化が進む過程で急激に貧困者の集住地区ができあがる。その密集した地域から放たれる強烈な臭さは、ヨーロッパから輸入された文献に意識的に書かれているにおいに関する発見も影響されて、日本人からも意識的に認識され始めたのである<sup>20</sup>。そしてその悪臭はむしろ貧困を発見する手段として利用されはじめ、日本の貧困層はもちろんのこと、異文化の発見及びその価値の切り下げという過程<sup>21</sup>にもつながっていく。

「臭い」をもって貧しさを表象するという一方的な差異化に対して、泉鏡花や島崎藤村のような作家たちはその差別性に批判的な眼差しをむける作品を書いた<sup>22</sup>。そして彼らは実際ににおいがあるのではなく、においがあると言われているだけで、それを嗅ぐという一種のパフォーマンスを通して他者性を生み出しているだけであることを明らかにする。つまり実体としての「におい」と、感覚としての「くさい」の間には、論証可能な対応関係はないということを示したのである。そして 1910 年に出版された岩野泡鳴『撥展』を含む「泡鳴五部作」の小説群では、部落民であるという差別がむけられた対象に常ににおいの描写が伴われている。においというものは、意味するもののほうがにおいと結びつくときに、意味されるものを呼び寄せる、つまり意味を恣意的に作り上げる力を持つという<sup>23</sup>ことの発見が登場するのである。湯淺はこのように日本のにおいの表象に敏感に反応しており、差別に利用される臭さというものが、段々とその実体を失っていたことにも気がついていたのである。三橋は小林多喜二の『蟹工船』の中で、悪臭の中で悲惨に働いている労働者たちが、家族の手紙から陸にある彼らの「自家」の匂いを、必死にかぎ取ろうとする場面を用いて、そのような行為に表れているにおいへの感覚を匂いの「不在の在」説明<sup>24</sup>している。これと同様に、金、太郎が嗅ぐ母親の手紙からも、実はにおいがするはずもなく、結局「内地の匂い」というのはくさいとされている朝鮮の「臭い」に対応する形で作りあげられた「匂い」であり、実体をなさないものだったかもしれない。ある対象に対して何らかのにおいと臭さと認識し、表現するのはより力をもっている方である。すなわち、日本近代文学において侵略された側が侵略者の「におい」を感じる主体として悪臭を嗅ぎ、それをもって相手を低く位置づける場面はその反対に比べて比較的少ない。湯淺はこのような差異化過程で作り出されたにおいのイメージに実は実体がないことを認識した上で、「臭から匂へ」<sup>25</sup>という言説を、匂いから臭いへと戻していくことによって、近代日本のにおい認識にまで亀裂をいれていくのである。

また「棗」には日本人と朝鮮人の間に引かれている「におい」という境界線を綺麗に洗い流す場所、「お風呂」が登場する。松田君に金、太郎がもつ朝鮮性を批判された金、太郎父子はそれきり素麺を食べに酒幕に行かなくなったのだが、彼らが朝鮮的「臭」いで充満している市場の代りとして選択した場所が他ならぬ「お風呂」ということも意味深長である。

風呂に行つて裸になると、父親の盛上つた腕や、逞しい肩は見事に見えた。外の誰よりも背が高く、肉づきがよかつた。(184頁)

裸になり、どの場所よりも身体が強調される場であるはずの「お風呂」は、アイロニカルにも植民地朝鮮での区別の判断基準となっていた身体的要素が、どれだけ無意味なもので、無理やり作り上げられたものなのかを如実に暴露する装置として作用しているのである。

#### 4. 身体性によって喚起される「棗」の批評性

白い皮膚と黒い皮膚の対立関係のように、植民地支配による差異化は日本の「におい」と朝鮮の「におい」を対立させ、何が優越したものであるのか、その価値判断を強いる。しかし湯浅のテキストの中での対立構造は固定されているものではなく、常に転覆されることによって、内地人が用いた差異化の根拠がいかにも恣意的であり、無意味なものであったかを知らせてくれる。また金、太郎に与えられたある種の障害ともいえる身体性は、同化政策を合理化する論理として活用されていた優生学を欺き、転ぶという動作からもまたすべてが転覆される、矛盾した植民地政策への批判を探し出すことができる。

このように湯浅は一見見逃してしまいそうな身体性を用いることで差異の固定性を否定し、植民地支配の論理を無化する。近代の合理主義が理性をもって身体を抑圧してきたという言説<sup>26</sup>は植民地統治下でより強力に作用する。しかし感覚が理性の下位器官であるというこの言説さえ、金、太郎がにおいの感じ方から対象の性質を把握し、植民地主義に抑圧されていた朝鮮のものに対する愛情を解放していく過程を通して、覆される。

金、太郎の身体性も作家自身の自伝的特徴から借りてきてはいるものの、逆転という手法を用いるための計算し尽くされた要素であると考えの方が妥当であるだろう<sup>27</sup>。他にも感情をコントロールできず、大げさに笑ったり、急に怒ったり、あるいは泣いたりしてしまう母親のヒステリックな振る舞い<sup>28</sup>、朝鮮と内地を区別するにおいが全部洗い流される場所としての風呂の全裸の身体などからもわかるように、湯浅は身体にこと細かく性質を付与し描写することで、様々な感情的・感覚的効果をもたらす。しかしながら、湯浅は何も説明してくれない。なぜ矛盾が発生したのかを説明する代わりに続く場面にあるのは赤いトンボが飛んでいる青い空であり、ポプラの木の並ぶ道であるという、

朝鮮の風景である。このような場面の転換は「橐」が発表された当時から問題視されていた。次は作品発表月に『報道新聞』に掲載された芹澤光治良の同時代評の一部を引用したものである。

内地で専門学校を卒へた父が朝鮮に帰るとどうしてあんな風な朝鮮人に一棗に描かれたやうな朝鮮人になってしまうのか、好きで一緒になって朝鮮に渡り、子のために妾としての地位にあんずる母が、どうして子をすてて、日本へ逃亡しなければならないか、むせるやうに巧みに描いてくれる朝鮮の風物よりも、そこにもっと書くべきことが残ってゐないだらうか、難しい問題ではあるが。<sup>29</sup>

このように芹澤が感じている物足りなさ、すなわち、まだ語るべきことのあるはずの場面が急に途切れ、朝鮮の風景を執拗に描写する湯淺の手法は彼の作品の評価を損ねる要因としても作用したのだが、作品の時代的背景と推測される 1920 年代初期の植民地朝鮮を描く上で、その意図をあからさまにできないのはむしろ当然のことでもあるだろう。しかしながら植民地政策と朝鮮の現状の間で発生していた矛盾を知っている者の目で見ると、これ以上精密に植民地朝鮮の現実をアイロニカルに書き込んだ作品はないように読めるのである。

## 5. 結論

「橐」からは、日本人作家はもちろん被支配者である朝鮮人作家さえも認識できなかった植民地朝鮮の様相を発見することができる。それは個人のレベルにおける日本人の朝鮮人及び〈混血〉に対する差異化過程とその矛盾である。統治政策の成り立ちの過程やその裏側の意図はもちろん、支配者として振る舞うことになった個々の日本人が、そのことを正当化するために行わなければならない思考の流れとその矛盾に関しても、その過程を作家自身が身を以て経験した、在朝日本人であったからこそ気づけたものが事細かく記入されている。本稿ではその中でも、日本人との混合でより優等な存在として改良されるべき日韓〈混血〉に与えられた普通ではない身体性や、視覚的要素に隠れていたににおいに注目して分析を行った。湯淺は「橐」において、ににおいの感覚を用いることで、植民地支配下の「日本人が優越している」という認識が、強引につくりあげられた言説にすぎないということを示すのである。特に〈混血〉、そして子供の視座を取り入れることで、優越さの判断基準が説得力を失っていることをより強調させる効果を生んでいる。「橐」は登場人物の感情を豊かに表現した作品ではない。むしろ芹澤が言ったように「もっと書くべきことが残って」いると感じさせるほど、感情の描写が抑制された作品である。しかし「金、太郎」という名前の在り様や、「匂」と「臭」の構造化とそ

の転倒の表象において、日本人の優越さの主張が根拠のないものだと否定するのみならず、「内地の匂」と「朝鮮の臭」という対立関係自体が無意味なことだという点を喚起する。

「棗」は、在朝日本人が韓国併合により植民地化された朝鮮に意図せず植民者として編入された受動的な存在でもあった可能性を示唆することで、日本の植民地主義の「支配者」「加害者」の内部においても序列化が行われていたことを表象している。また金、太郎が祖父に抱く難しい感情からもわかるように、この作品は日本人を加害者、朝鮮人を被害者という二項対立の構造に置いていない。本稿では書ききれなかったが、「棗」は植民地朝鮮というそれ自体矛盾した空間に生身の人間の多様な位相が存在し、それはいつでも転覆される可能性を孕んでいるということを示唆している作品であり、これからも多様な視座から分析できる作品だと考えられる。

## 註

- <sup>1</sup> 本稿における「棗」の引用はすべて『カンナニ：湯浅克衛植民地小説集』（池田浩士編、インパクト出版会、1995年）により、括弧内に頁数を記す。
- <sup>2</sup> 朴光賢「湯浅克衛文学にあらわれた殖民2世の朝鮮」『日本学報』第61集2巻、2004年。
- <sup>3</sup> 初出から「金、太郎」と金と太郎の間に読点（、）が打たれている。この論文においては彼の名前を問題とする時は「」付きで、ただ指示する目的で書く時は「」なしで表記することにする。また朝鮮の代表的な苗字と日本の代表的な男児の名前の結合である「金、太郎」は日本の金太郎伝説の金太郎と読まれうる可能性を意図しているように考えられる。
- <sup>4</sup> 1927年に朝鮮から離れていた湯浅は日本の植民地統治により発展したといわれる朝鮮を観察するために1936年4月に朝鮮にわたる。そしてその印象を記したのが『文学評論』1936年4月号掲載の「心田開発—朝鮮新風景」である。「棗」の発表3ヶ月後にこのエッセイをもとにした短編小説「心田開発」を『自由』1937年10月号に発表する。小説「心田開発」には「棗」の主人公が成人して日本での留学後、久しぶりに訪れた朝鮮の変貌をどのようにみているのかが綴られている。このようなことを考慮し「心田開発」が発表当時の1937年を背景にしているとすれば、同じ主人公が後語り形式で語っている「棗」の時代的背景は1920年代初期だと推測することができる。
- <sup>5</sup> 長瀬由紀峰「湯浅克衛と「金、太郎」—「棗」「心田開発」における風景と混血の表象—」『日本文学文化』14号、東洋大学日本文学文化学会、2014年、39—54頁。
- <sup>6</sup> 池田浩士「解題・註」前掲書『カンナニ—湯浅克衛植民地小説集』。
- <sup>7</sup> ジュリア・クリステヴァ著（枝川昌雄訳）『恐怖の権力：「アブジェクション」試論』法政大学出版局、1984年。

- 8 クラウディア・ベンティーン (田邊玲子訳) 『皮膚—文学史・身体イメージ・境界のディスクール』法政大学出版局、2014年、203頁。
- 9 ベンティーン前掲書、204頁。
- 10 日本人にも視覚的感覚をもとに自分のもっている皮膚の色を基準とする〈混合皮膚〉、あるいは混合された身体特徴に対する恐れと驚愕は存在していた。このような混血に関する言説は、皮膚の色に代表されるような視覚的に捉えられる身体イメージの劣性の付与に加え、その生物学的機能に対する理論的検証という、科学的言説の形を伴って構築されていくことになる。
- 11 街道筋にあつて酒食を売り、客を泊めた安宿。
- 12 作品の時代背景であると推測できる1920年代初期の朝鮮の初等教育において基本的に朝鮮人は普通学校、日本人は小学校と区別されていて、特殊な事情が認められた場合、朝鮮人は小学校に入学することができた。金、太郎がどのような仔細により小学校に通えることになったか、本文上には明示されていないが、金、太郎にどちらの教育を受けさせるかで親がもめ、日本人の家に預けることになったという点から金、太郎の教育問題がこの作品をなす重要なキーワードの一つであると容易に推測できる。
- 13 金、太郎からすれば、祖父は父の本妻との離婚を認めず自分と母を惨めな境遇に陥れた人である。金、太郎にとって朝鮮人とわかる服装をした父親は酒幕で会った日本人級友とその家族の前で限りなく小さく見えていた。しかし、風呂場で裸になった父親は頼もしく、誇らしいものと感じている。しかしまたその頑強な体は祖父の登場により、祖父に平身低頭し、情けなく背中を流す存在として転落してしまうのである。
- 14 物語の中で小学生たちに内地から来た人や内地から来たものは妥当な理由がなくても「内地」であるだけで素晴らしいものとして認識されている。
- 15 「金、太郎」と名前表記を人体だと見立てた時に、頭部にあたる「金、」という名字が占める領域が胴体にあたる「太郎」に比べ大した差がなく、名字 (=頭) が大きくかつ重く感じ取られる。「、」を設けることによって視覚的な効果まで得ているのではないだろうか。
- 16 黒川創「解説 旗のない文学」『<外地>の日本語文学選③—朝鮮—』新宿書房、1996年、343頁。
- 17 「ゴム臭い」の「臭い」は「におい」ではなく「くさい」と読むのだが、本稿では漢字の読みより、においを喚起する表現において、悪臭の「臭」と香りの「匂」のどちらを採択しているかを重視して論じているため、「ゴム臭い」も例として認めることにする。
- 18 홍양희 [ホン・ヤンヒ] 「식민지시기 남성교육과 젠더-양반 남성의 생활상과의 비교를 중심으로- [植民地期男性教育とジェンダー—両班男性の生活像との比較を中心に]」『아시아여성연구 [アジア女性研究第]』第44集 1号、숙명여자대학교 아시아여성연구소 [淑明女子大学アジア女性研究所] 2005年、131—156頁。

- 19 日本と朝鮮では初婚年齢が大いに異なり、朝鮮の方が断然低かった。当時朝鮮人男性は朝鮮で早婚をして既に妻子がいたことを隠蔽し、日本人女性と結婚をしようとするものがあつた。申賢敬の「在朝日本人社会の形成と朝鮮人男性の「内鮮結婚」」(江原大学校大学院史学科修士論文、2011、50—52頁)によると、当時の朝鮮人男性に見られる早婚は、親の意志による強制結婚が大半であつたため、朝鮮人男性は日本での異郷生活を通じて、旧習という親の輪から解放されるようになると、自身の意志によって日本人女性との結婚を成り立たせていたという。この「親の強制」は儒教的価値を重視するという点で両班の階級により強く強いられる。すなわち金、太郎の母の親が、視支配者にあたる金、太郎の父と娘の結婚を許した理由となつた「両班」という階級が、むしろ金、太郎の父親が早婚している要因であり、また父親と朝鮮人妻との離婚を不可能にする要因でもあつたといえる。韓国併合により一つの国にはなつたものの、実のところお互いを知らないまま全く異なる二つの国が強制的に一つになつたことで起こつた問題だと理解できるだろう。
- 20 三橋修『作家は何を嗅いできたか—におい、あるいは感性の歴史』現代書館、2009年、18頁。
- 21 1897年に松原岩五郎によって書かれた「慶尚道風土記」では、作者が朝鮮の大邱で感じた悪臭の描写し、その場を否定するものとしてにおいを利用している。異文化への態度は、くさいというものをある「群れ」に向かつて、あるいは「場」にむかつて投げかけるものとして作用していたのである。三橋前掲書、45頁。
- 22 三橋前掲書、50—57頁。泉鏡花は「貧民倶楽部」で上流階級と貧困層を対比し、何が一般的にくさいかというのではなく、誰がどういう状態のときに何をわざわざくさいというのかを、意識的に書いている。感覚の個人差に敏感で、感覚を一般化して下層を発見し、においに下層性をもたせることに批判的であつた。また島崎藤村は『破戒』において「新平民」「穢多」「人種」を使い分けながら、においというものをもって差別への批判性を表現している。
- 23 同上、62頁。
- 24 同上、117—118頁。
- 25 三橋前掲書の第1章のタイトルでもある。
- 26 坪井秀人編『偏見というまなざし』青弓社、2001年、223頁。
- 27 子規や北原白秋が身体的障害をもつことが近代合理主義から脱却できる要因の一つになつたという正高信男の論考(坪井前掲書「第8章. 感覚の抑圧と近代主義」、205—228頁)と一脈相通ずる面がある。
- 28 感情をコントロールできず、大げさに笑つたり、急に怒つたり、あるいは泣いたりしてしまう母親の姿は近代日本で再編成された女性の病氣・ヒステリーの表象 そのものであり、また混血の子を捨てる母親というイメージに帰結してしまう。「母性愛は本能ではなく、母親と子供の日常的なふれあいの中で育まれる愛情である。それを本能とするのは、父権社会のイデオロギ

一であり、近代がつくりだした幻想である」というバダンテールの主張（E・バダンテール（鈴木晶訳）『母性という神話』筑摩書房、1991年）は、たしかに人間の生物的側面を考慮しきれないものであるといえるかもしれない。しかし、家父長社会で抑圧されてきたはずの母親が家父長制によって強調された母性を失うことで処罰されなければならない存在として描かれる「褻」からは、さまざまな矛盾に意識的にしようとしていたが、ジェンダー的側面まではまだ意識しきれない湯浅の限界が垣間見える。

<sup>29</sup> 芹澤光治良「文藝時評（4）—主題の消極・積極性—伊藤、酒井、湯浅氏等の作品—」『報道新聞』昭和12年7月3日。中島国彦編『文藝時評大系 昭和編』第十四巻、ゆまに書房、2007年。

\* 本稿は東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻平成26年度修士論文「日韓〈混血〉を通してみる植民地朝鮮の矛盾—湯浅克衛の「褻」と「心田開発」をめぐって—」を加筆・修正したものである。